【110】

| | |
|---|---|
| 氏　名（本籍） | 今野勝幸（福島県） |
| 学位の種類 | 博　士（言語学） |
| 学位記番号 | 博甲第 5985 号 |
| 学位授与年月日 | 平成 24 年 3 月 23 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 |
| 審査研究科 | 人文社会科学研究科 |
| 学位論文題目 | **A Study of Roles of EFL Learners' Intrinsic and Extrinsic Motivation in Motivational Beliefs and Learning Behavior**<br>（日本人 EFL 学習者の内発的／外発的動機づけが動機づけ信念や学習行動に果たす役割についての調査研究） |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 主　査 | 筑波大学教授 | | 久保田　章 |
| 副　査 | 筑波大学教授 | | 磐崎弘貞 |
| 副　査 | 筑波大学教授 | Ed.D.（教育学） | 平井明代 |
| 副　査 | 千葉大学准教授 | | 本田勝久 |

## 論文の内容の要旨

本論文の目的は、Deci and Ryan（1985）等の自己決定理論における「内発的／外発的動機づけ」とDörnyei（2005）等の「第二言語（L2）自己」という理論的枠組みに基づき、英語の学習における動機づけと日本人学習者の自律性の関係について検証することである。

本論文は、大きく4つの研究によって構成されている。研究1では、教室内外における包括的な「一般的英語学習」を取り上げ、(a) 動機づけや自律性に関する学年差、(b) 動機づけの要因、自律性、熟達度の関係、(c) 内発的動機づけと外発的動機づけの相互関係と自律性との関係という3つの視点から全部で9つのリサーチ・クエスチョンを設定し、検討を行った。その結果、動機づけや自律性に関して有意な学年差は認められなかったが、動機づけと自律的行動の一端である学習に対する責任の認識との関係が認められ、さらに外発的動機づけの自律的英語学習への影響等が示された。

研究2では、教室内の学習活動やタスクに関連する「状況に特化した英語学習」に焦点を当て、タスクの違いにおける学習者の自律的行動と動機づけの関係について検討した。異なるタスク実施条件下での学習者の方略（ストラテジー）の使用に関する調査を行い、(a) タスク達成に対する動機の形成状況、(b) タスク遂行中の動機づけ要因の変動、(c) 学習者の自律的方略行動と動機要因の関係、という3つの視点から5つのリサーチ・クエスチョンについて分析を行った。内発的動機要因である「興味」と外発的動機要因である「価値」の相互関係が「努力」と関係していることが示唆され、タスク遂行条件の違いによって価値、興味、努力、方略使用の関係が異なるなどの結果が得られた。

研究3では、特に「外国語としての英語」という学習環境を考慮に入れ、動機づけと「L2自己」の関連性とその変動の可能性について7つのリサーチ・クエスチョンを設定して考察した。日本人学習者の場合、学習努力が高まるためには、「理想のL2自己」だけでなく、「義務的なL2自己」や外発的動機づけが影響すること、L2自己と動機づけ要因は教室内において共に変動する可能性があることなどが明らかになった。

研究4は、研究3で示唆されたL2自己と動機づけ要因の変動について、実際の大学の授業における「教

育的介入」を通じて検証したものである。L2 自己の尺度、動機づけの尺度を作成して調査し、3 つの仮説と 1 つのリサーチ・クエスチョンについて分析した。その結果、教育的介入が動機づけや L2 自己の発達に貢献すること、L2 自己と内発的／外発的動機づけは相互に作用しながら発達し、学習者の英語学習に対する努力を高めることなどが確認された。

以上の成果に基づき、日本の教室における教育的示唆として、学習者の心理的欲求を満たすような授業構成、タスクの難易度を考慮したストラテジー使用の指導、協力的グループワークの実施、学習者の義務感の助長等の有用性等が提案されている。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

第二言語（外国語）の学習において実際に動機づけがどのように学習に影響するのか、さらには日本人学習者に対して動機づけがどのように重要であるのかという問題については、これまで十分な議論がされてこなかった。このような課題に対処するため、本論文は幅広い先行研究を丁寧に精査するとともに、動機づけと L2 自己との関係を志向性、自律性、タスク、教育的介入など多様な観点から大変念入りに分析しており、当該領域における先駆的な研究と高く評価できる。

学習を「一般的な英語学習」と「状況に特化した英語学習」の 2 つのレベルに分けて調査した点、自己決定理論における「自律性」と言語習得研究における「自律性」の概念が異なることを明確にした上で両者の関係性を追及している点、自律的行動を認知／メタ認知方略と関係づけて動機づけ要因の影響を探索している点、理論に基づく教育的介入の結果を含め、多くの動機づけ要因と変数から動機づけのメカニズムを解明しようとしている点など、研究方法にも工夫や独自性が見られる。特に L2 自己と内発的／外発的動機づけの関係に着目した点はまさに独創的である。また、分析方法や統計データの扱いも基本的に妥当で適切である。

その一方で、プランニングにおけるストラテジーと動機づけの関連性、動機づけ要因と学習経験の位置関係、教育的介入における介入の共通性などについてさらに詳細に論じることができれば、一層堅固な議論が組み立てられると考えられる。さらには、ゴール理論との関係や、動機づけの成果をどのように測定するかという、動機づけ研究の一般的な課題について検討することで本研究の今後の発展が期待される。

全体として、本論文は、日本人英語学習者の場合、内発的動機づけ要因だけでなく、外発的動機づけ要因や義務的な L2 自己という概念も言語学習に寄与することを実証し、教室内での英語学習経験が L2 自己の発達に影響を与える可能性を示唆するなど、動機づけ研究に大きく貢献するものである。

平成 24 年 1 月 31 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。